

「私の論文作法」

巨人との格闘の仕方

柳原 透（拓殖大学国際学部元教授）

序

巨人の肩の上に立つ、という表現がある。そうすることで、自身は小人であっても、大きな見通しを得ることができる、という趣旨である。しかし、巨人の肩の上に立ちうる前には、巨人と格闘しなければならない。本稿でお示しする論文作法は、そのような格闘の記録であり、巨人とは、日本の開発経済学の泰斗であられた石川滋先生である（以下、敬称を略し「石川」とし、敬語表現も略する）。

石川は、数々の先駆の業績によって国際開発分野での研究の進展に大きな貢献をなし、また後年には知的支援の実務の世界にも関与した。石川が2014年1月4日に94歳で逝去した後に、2つの学術誌で特集が組まれ、私はそれぞれに1本の論文を寄稿した。それらは、「石川滋と開発政策研究」（『アジア経済』56-3, 2015年、以下では「政策研究」論文と略称）、「石川滋の開発経済学方法論の継承と発展」（『国際開発研究』27-1, 2018年、以下では「方法論」論文と略称）であり、前者は政策論を、後者は方法論を、対象とする。これらはいずれも、石川の研究の独自の意義を再確認し、（追悼や称揚ではなく）その継承と発展を図る上での方向を示し検討事項を明らかにする、ことを目的とした。以下、これらの論文の構想と執筆過程での検討事項、そして私なりの到達点、につき記す。なお、本稿では、執筆時期とは逆順で、「方法論」「政策研究」の順で紹介し、所感を述べるとともに、執筆に当たったの作法をお伝えする。

1人の学者の仕事の全体を捉え、それを評価しようとする論文を執筆する際の基本の作法として、「相手の土俵で四つに組む」ことがある。これは、その学者本人の問題設定と立論、そして使用した資料・情報のみを前提とし、その範囲内のみで検討ないし批判を行うことである。巨人を相手に小人がそのような決まりで取り組みうるのか、と訝しく思われるかもしれない。しかし、しうるのである。その謎の答えは、次の問いにある。「書くのと読むのとどちらが大変か?」。そうです、もちろん、書くほうが大変です。ずっと大変です。書く時には、書き進めることにエネルギーと注意を向けねばならず、それだけ他のことに向けられるエネルギーと注意が少なくなります。ということは、読みさえすればよい小人は、著者たる巨人に対してそれだけ余裕のある立場にあり、著者が気づかないことに気づくことができる、ということです。という次第で、私は上記の2つの論文に取り組み、執筆することができたのである。

1. 「方法論」論文における構想、検討課題、到達点

1.1. 構想

本論文の執筆に当たっての構想の中心は、時期を追って研究の展開を跡付け、そこに内在する論理を見出すこと、そしてその継承と発展を図る上での検討課題につき考察すること、であった。石川の「方法論」としては、大きく4つの貢献を取り上げた。すなわち、①「開発経済学」の問題設定と研究方法、② 市場経済の(低)発達、③ 発展段階論 / 類型論、④「適応」の政治経済学、の4つである。ここでは、最初の3つを振り返る。

石川には、そのマニフェストとも呼ばれる『開発経済学の基本問題』（1990年、以下では『基本問題』と略す）という著作がある。石川は「研究の問題設定が現代開発途上国の開発イシューの…適切な把握を土台としてなされ、…[そのようにして設定された] 独自の問題領域を探求し、それに迫る」ことを「開発経済学の基本問題」と定めると定める。さらに、既存の経済理論の中に存在しない概念や分析用具を開発し使用することを、開発経済学の独自性の第2の側面として指摘する。このように、石川の開発経済学方法論を検討するにあたっては、上記の第2の側面（狭義の「方法論」）に限定せず、「開発イシューの適切な把握」や「問題設定」といった側面を含めて（広義の「方法論」）対象とすることが肝要である。

『基本問題』第1章「開発の経済学は必要か」は、開発経済学の存在意義、基本性格、そして構成要素についての、石川の立場・見解を表明した論稿である。石川は「経済開発」を「かつての植民地あるいは従属地域が、今日の国際環境の下において、国際的交流のネットワークに入りながら、政治的独立と並んで経済的独立ないし自立を維持し、かつ持続的な経済成長発展のための政治的経済的条件を備えること」と定義する。ここで石川は、「経済的自立」をマクロ経済バランス、家計レベルの収支と厚生、生産力・資源配分システムの3項の内容をもつ事柄として定義し、それら3項の課題を完了していない国を「開発途上国」と呼ぶ。

このように捉えられた現代の「経済開発」の特徴として、石川は、開発の始動が政治決定としてなされたゆえの「市場経済の低発達」と「初期条件の多様さ」とを、開発経済学における独自の問題領域として特定し、2つの主な研究課題を設定した。その1つは、現代の途上国の経済システムを特徴付け、またその変化の過程を明らかにする、ことである。第2は、現代の途上国を初期条件の主な特徴によりグループ分けし、グループごとに開発のプロセスを記述する開発モデルを立案することである。その後の石川の研究は、上記の2つの研究課題にそれぞれに対応して、経済発展の段階論と類型論の構築を志向し追究した。さらに、段階移行をもたらすメカニズムに関連して、「適応」の政治経済学へと考察を進めた。

1.1.1. 市場経済の(低)発達 という問題の設定と研究の展開

この論題に関して、石川には「慣習経済と市場経済の浸透」（1973、『基本問題』第6章）と「市場経済の低発達と政府の役割—輸入代替工業化のケース」（1975）という2つの重要な著作がある。これらは、「市場経済（の発達）」の概念規定において、「外延（の拡大）」と

「内包（の進化）」とのそれぞれに対応する。それらはいずれも、「現代経済開発理論が発達した市場経済を前提とする経済理論に依存しており、研究対象と研究方法の間に著しい齟齬があるため、研究が制約されている」との認識を踏まえ、「そのような研究状況の克服に向け、市場経済の低発達という状態と市場経済の発達という変化の過程について独自の研究を行う」との動機に導かれている。石川（1975）では、市場、市場ルール、市場経済、市場経済の発達・低発達、といった基本概念が導入・定義され、（経済史における）市場経済発達の標準メカニズムが、いずれも民間主体の役割を中心とする2つの基本プロセス——「市場ルールの発達」と「個別経済主体および相互関係の発達」——で構成されるものとして様式化され提示され、それらに関わる政府の役割が示される。

1.1.2. 研究パラダイムとしての発展段階論と発展類型論

石川の開発経済学の研究パラダイムの根幹をなすのが、開発モデルとしての発展段階論と発展類型論である。段階論は、生産力と制度のそれぞれの視点から構想されうる。類型論は、主に生産力の視点を反映するが、制度の視点も加味しうる。発展段階論には、対象国を全体として大きく捉えるものと、さまざまな分野を個別に対象とするものがある。前者（「大段階論」）は、「近代主義」（市場経済化・民主主義）の価値前提を踏まえ、近代化論の視点に基づき、経済・政治・社会の変化の過程を一国レベルで把握し定式化する。

石川自身による明確な提示は、その研究人生の遅い時期に石川（2006）においてなされ、経済（制度、生産力）に加え政治体制を含む発展段階の定式化がなされた。分野別発展段階論は、世界銀行の構造調整政策を批判し自らの代案を提示する試みの一環として、政策分野別の「幼稚市場育成のための」処方箋を策定するための基盤として、その作成が提起された（石川1994）。Gurley-Shawの「金融発展の理論」が参照され、その現代の途上国への適用に当たっての注意が述べられるとともに、他の分野についても「制度の発達についての先進国の経験を学び、そこから制度発達のスタイライゼーションを行ない、政策論を立案する」ことが提唱される。

発展類型論を規定するのは、生産要素の賦存に関する初期条件の多様さであり、労働過剰経済を対象とするルイス・モデル、自然資源過剰経済を対象とする余剰のはけ口(vent-for-surplus)モデル、輸出産品の性格を鍵要因とする主要産品(staple)モデル、を基本モデルとし、それぞれのバリエーションにつき発展持続かあるいは罫に落ちるかが示される。

1.2. 継承と発展のための検討と到達点

1.2.1. 市場経済の（低）発達という問題とその研究

以下の4つを検討課題とした。すなわち、①「市場経済」および「市場経済の（低）発達」の概念規定、②「市場経済の低発達」の実際上の重要さ（事例）、③「市場経済の低発達」の実際上の重要さ（一般論）、④市場経済の発達に伴う政府の性格および能力の変化、の4つである。

石川は、「市場経済の低発達」という現実認識を自らの開発経済学の礎石とする。その実際上の重要性についての見解としては、石川(1975)の基本命題(1)がある。そこでは、市場経済の低発達ゆえに生産力（「資本、技術、経営能力などの全体としての蓄積水準」）が有効に活用されていない、との判断が検証すべき課題として示されている。しかし、石川の挙げる事例が「市場経済の低発達」という根本認識の例示として適切であるかどうか、そして検証において推論が適切であるかどうか、はさらなる検討を要する。実際、石川は一般論風に次のように述べている（石川 1990）。

「開発過程での市場経済の発達は、社会的分業、流通の物的インフラ、市場交換の諸制度、の3つのすべてにわたって、生産諸力の発達に対する適応として生じていることが多い。そのため、市場経済の低発達が開発を妨げているような実際例を見出すのは困難である。」ここに石川が述べるように「市場経済の発達は…生産諸力の発達に対する適応として生じていることが多い」とすれば、市場経済の（低）発達という問題の独自の意義は大きく損なわれる、と思われる。

1.2.2. 研究パラダイムとしての発展段階論と発展類型論

3つの検討課題を立てた。すなわち、①「段階論」は有効か、重要か、なしうるか、②「類型論」は有効か、重要か、なしうるか、③ 継承・発展のための“石川 Lite” の模索、の3つである。

開発モデルとしての発展段階論と発展類型論は、石川の開発経済学の研究パラダイムの根幹をなす。開発経済学の研究において、それらはどのように位置付けられ評価されるべきであろうか。われわれは「段階」や「類型」といった言葉には日常語としてもなじみがあるので、これらを研究における記述や分析に用いる専門用語として自覚する程度が低いかもしれない。石川の論考と向き合い、この点での自覚を高め、その上で、専門用語として用いるかどうか、用いるとすればどのように用いるか、が検討すべき課題としてある。

発展段階論について石川（1997）は次のように述べる。「段階とは、資源配分制度の違いや、それに併行する関係者の意識構造…ほか多くの条件の違いによって区別される…。この概念は分析的に不可欠というわけではなくても、オペレーショナルにはきわめて有効である。」

また、分野別段階論の意義を示すとともに、その適用に当たって直面しうる困難をも明らかにする。そして、次の研究課題を提示する。「このアプローチを普及するには、さらに市場経済を構成する個別市場（生産物市場、要素市場）ごと、またさまざまな政策局面ごとに、発展段階モデルを立案し、その中での現段階を確定し、それについての（段階適合的と、段階促進的との）二層的な政策オプションを特定するという仕事を積み重ねることが必要である。それはまた、特定の国グループごとに別々になされる必要がある。それは険しいけれどもやらなければならない研究課題だと思われる。」

石川(1991)では、発展類型論の開発モデルにつき、以下の研究課題が提起され、コメント

が付される。

① 3つの基本モデルはどれも、理論面での補強を要する。

② 現代の途上国の要素賦存差による類型化は、[石川が]示した基本モデルとバリエーションで尽くされてはいない。

③ 類型化ができたとしても、それを動学モデルとして構築するのは容易ではない

石川の「開発経済学」が継承され一層の発展を見るためには、石川の研究の問題設定/方法/成果の独自の意義が理解・評価され、後続の研究の関心と対応付けられ適切に活用されなければならない。石川の問題設定（市場経済の低発達、初期条件の多様さ）には独自の意義があるが、上に述べられているように、石川の研究パラダイム（段階論と類型論）は難度・要求度が高く、不可能とも思える大きな負担を課する。そのため、「すべき研究」の指針とするにしても、石川が求める基準ではやりきれない。実際には、“石川 Lite”を目指すしかないであろう。それ自体、どこをどう“Lite”にするのか、試行錯誤で模索するしかないことである。そのような模索に当たって、すべきだができていないことの自覚（“無知の知”）を銘記することが、それとして意義があるであろう。

2. 「政策研究」論文における構想、検討課題、到達点

2.1 構想

石川の国際開発政策研究の展開を3つの時期に分けて跡付け、その特徴と意義を確認し、そして評価する。石川は、第1期(1970年代半ばから1980年代末)における基盤の構築を踏まえ、その後、国際開発界の動向にも注意を払いながら研究と実務の到達点と限界を確認し、それらの限界を乗り越えるための研究を2段階にわたり展開させた。第2期(1990年代)には、『開発経済学の基本問題』で提示した独自の「開発経済学」の基礎の上に、対象国別政策論として「開発協力政策研究」が構築された。第3期(2000年代)には、「開発協力政策研究」を拡張して、開発政策と援助体制を含むシステム論として「国際開発政策論」が模索された。

2.1.1. 第1期(1970~80年代:政策論への基本視座の設定)

『基本問題』(1990)は、3つの意味で、石川のその後の国際開発政策研究の性格と方向を予見させる内容を含んでいる。

① 「経済開発」の定義に「政治的条件」を明示している。

② 政策そして政治に関心事とする責任ある経済学者として政治をも研究対象として含むことが表明されている。

③ 第7章「市場経済の低発達と経済自由化の限界」では、この後の開発政策研究を貫く2つの基本命題が提示される。

2.1.2. 第2期(1990年代:「開発協力政策研究」の展開)

1990年代の研究活動の展開を反映する主要な著作に見られる重要な論点として以下の諸点がある。

- ① 開発協力政策の方法論（石川 1991a, 1991b）
- ② 世銀の構造調整への評価と独自の定式化（石川 1994, 1996）
- ③ 石川「開発協力政策」研究の集約（石川 1997）

2.1.3. 第3期（2000年代：「国際開発政策論」の構築に向けて）

石川は2000年代の（開発政策と援助体制を含む）「国際開発政策論」の主要な成果を石川（2006a）として世に問う。同書の第1章（石川 2006b）は新たに書き下された100ページにわたる論文であり、後続の諸章にはそこに至る途上での重要な成果が含まれている。重要な中間点を画したそれらの既発表論文のいくつか、そして同時期に発表された他の重要な論文、には次の主要な論点が含まれている。

- ① 貧困削減に資する開発モデルの模索（石川 2002, 2003）
- ② 「国際開発政策論」の枠組の提示（石川 2006b）
- ③ 対アフリカ援助方針の模索（石川 2005, 2008）

2.2. 継承と発展のための検討と到達点

2.2.1. 石川「国際開発政策研究」における「文化伝播」

上に要約した石川の政策研究の軌跡を、文化伝播モデルにより要約することで、石川の「国際開発政策研究」の特徴を示す糸口とする。

石川による文化伝播モデルについての記述を研究者に当てはめると、次のように言うことができる。

「ある研究者がある時期に採用する研究対象および方法は、その研究者により独自に創造され設計されるよりも、『文化伝播』により他から移植されることが多い。・・・それらの外来要素がその研究者に定着するためには、その研究者の既存の研究のテストを受けねばならない。既存の研究になじまないときには、外来要素が既存研究に適応するか、既存研究が外来要素に適応することにより、両者の乖離が…縮小されねばならない。・・・研究の過程はしばしばこのような適応のための試行錯誤の過程となる。・・・研究の成否は…適応の成否にかかる。」

石川においては、「基底文化」をなす既存研究として自らの「開発経済学」があり、それが、途上国経済への基本視座を、そして基本問題への集中という研究姿勢を、そしてさらに政策論における強い実証志向を、定めている。そこに、国際開発界からのさまざまな情報が「外来文化要素」としてもたらされる。その主要なものは、1980-90年代には世界銀行が主導する「構造調整」の方針であり、1990-2000年代には目標としての「貧困削減」と実施方法としての「援助モダリティ」、そして2000年代には支援の対象としての「アフリカ」と改革の焦点としての「政治体制」であった。

2.2.1.1 世界銀行の「構造調整」への石川の適応

石川の途上国経済への基本視座は、1980 年前後に世界銀行の「構造調整」が出現する前に「基底文化」として構築されていた。それが、石川が「構造調整」を検討し評価する基盤となった。外来文化要素として世界銀行の「構造調整」に接したとき、石川はそれを自らの既存研究の基底文化の俎上に載せ、その理論上の根拠である新古典派経済学は市場経済が低発達である低所得途上国では妥当せず、したがって世界銀行の「構造調整」は低所得途上国では成果を見込めない、との見解を示した。その研究の独自の成果は、「市場経済発展促進的アプローチ」の提唱、途上国での「適応」の意欲と能力の重視、という2つの面で顕著であった。

2.2.1.2. 「貧困削減」目標と協調援助体制への石川の適応

1990 年代から 2000 年代にかけて、経済成長に代えて「貧困削減」が国際開発界の目標として確立され、またその実現のための協調援助体制が推進された。この新たな外来文化要素に対し、石川は自らの基底文化をなす「経済成長」目標を固持し、それに代えて「貧困削減」を最高目標とすることの根拠を問い、また「貧困削減」目標の実現を裏付ける「開発モデル」が存在しないことを指摘し批判する(石川 2002)。その後、石川は適応を図り、「成長促進を基礎とする持続的な貧困削減」と読み替えた上で自身の最高目標として受け入れ、その達成に資するよう成長と貧困削減を関連付けた新しい「開発モデル」の構築を目指す(石川 2003)。その際、石川の基底文化である「開発経済学」中の成長政策論要素として肝要である「近代産業の構築や市場の育成に向けての産業政策」があらためて強調される。

2.2.1.3. 「アフリカ」と「政治体制」重視への石川の適応

2000 年代に国際開発界の支援の主対象が低所得国とりわけ「アフリカ」へと収斂した後には、石川は、アフリカを中心とする低所得国を自らの開発政策論の主対象とする、という適応を行う。英国などでのアフリカを主対象とする政策面および研究面での展開に多くの注意を払い、その影響のもとに改革の焦点として「政治体制」を位置付ける適応がなされた。この適応にあたって、石川は、経済の生産力と経済制度についての発展段階に加え、政治体制の発展段階を導入して発展段階論を拡大し、「政治体制」の段階移行を明示する開発モデルを提示した。また、近代化過程の全体像を強調する中で、経済面に限定せず、政治・行政・社会・文化を含むより広い概念として「開発」を再定義し「開発のビジョン」を示すに至った。

2000 年代半ばからの石川の政策研究は、日英両国間での相互学習と相互理解を目的として進められた。石川[2005]での研究の中心課題は、それぞれアフリカと東アジアを主対象とする英国と日本の援助モデルを、初期条件、開発プロセス、援助の役割の3点につき比較検討することである。石川は、自らの基底文化である「開発経済学」の構築に当たり、参照

した東アジアの経験に依拠して、成長促進による経済構造の近代化が政治体制の変革をもたらす効果を強調し、英国側にこの点の学習・理解を期待する。

2.2.2. 石川「国際開発政策研究」の特徴

以上の文化伝播モデルに即しての要約を踏まえ、石川の開発政策論の顕著な特徴を下に5点記す。これらは開発政策研究に取り組む上での心構えないしは指針として重要な示唆を与えるものである。

- ① 自らの開発経済学の基盤の上に独自の政策論を構築した
- ② 現実認識を出発点とする
- ③ 政策論としての要件を厳しく定める
- ④ 長期開発と政府の役割を重視する
- ⑤ 使命感・責任感・義務感が研究の展開を導く

2.2.3. 石川「国際開発政策研究」への評価

2.2.3.1. 石川「国際開発政策研究」の貢献

上に記した5つの特徴はいずれも、開発政策研究への石川の貢献として特筆すべきものでもある。いくつかの補足を行おう。

第1の特徴については、「構造調整」について石川が独自の方針と施策を模索したことが重要である。それは、初期条件の違いにより分類される発展段階論を概念上・方法上の基盤とする。「構造調整」政策策定に関するこの方針に従い開発政策論の展開を図ったことの意義は極めて大きい。

第2と第3の特徴については、貧困削減を主題として開発モデルを構想する際に、現実認識から出発することを強調した石川の姿勢が重要な一例をなす。

第4の特徴である「開発主義」は、開発経済学および開発政策論において大きな論争の対象としてある。開発主義の提唱者の中で、石川は、長期開発のシナリオを発展段階の移行を含む「開発モデル」として定式化することと、制度・組織面に注目し市場経済の育成を政府の役割として強調することにおいて、独自の重要な位置を占める。開発の全体像を見据えその中での政府の必須の役割を見定める石川の視座と方法の意義は大きい。

第5の特徴である「使命感・責任感・義務感」は、国際開発界が発する外来文化要素との接触に際しての反応ないし対応と強く関連している。石川はこれらの外来要素を真剣に受けとめ、そして体系立った考察を踏まえて自らの見解を鮮明に打ち出し、国際開発界への積極関与を志した、稀有な存在である。その根底には、途上国の開発に貢献せんとする強い使命感・責任感・義務感があった。

2.2.3.2. 石川「国際開発政策研究」への疑問と要検討課題

石川の開発政策研究に対し疑問点ないし要検討事項としてある5つの事柄を指摘する。

- ① 「政府の役割」の重視と「政府の能力」の制約の軽視
- ② 政策・制度改革にかかわる「適合」論と「適応」論の不統一
- ③ 「適応」、「文化伝播」、「新家産制」をつなぐ議論の不在
- ④ 政治体制改革から経済成果に至る因果連関の不鮮明
- ⑤ 「政治体制の段階移行」を起点とする開発シナリオの不備

結語 私の論文作法

上の2本の論文の要約紹介は、石川滋という巨人との、その研究の継承と発展を図るべく格闘した記録である。私が目指したのは、「方法論」と「政策研究」のそれぞれにつき、石川の独自の貢献を確認するとともに、疑問と要検討課題を提示することであった。私なりに両方をなし得たという達成感を感じている。格闘の始めにはぼやけた大まかな見通しがあったのみであったが、粗稿の改訂を繰り返す中で、徐々に焦点が定まり輪郭が現れた。仕込んだ種が熟成し何かが生まれる、とでもいった過程であった。種を仕込むのは論者たる私の仕事であるが、どの種がどのように熟成し何になっていくかは、時を経て自ずと起こることであって私が起こすことではない。

私の論文作法を要約すれば、「人語を尽くして天声を待つ」とでも言えよう。仕込んだ種のどれがどのように熟成してどのようなものになるかは事前には分からない。したがって仕込める種はすべてを仕込まねばならない。それは、手間暇をいとわずたどたどしくくどくどしい作業を続けることであり、それ自体は楽しいことではなくむしろしばしば苦痛を伴う。ただ、それを尽くさないと天声が聞こえないような気がする。そして、天声(らしきもの)が聞こえた暁には、余計なものはすべて自ずと引き下がり、できあがりの姿が迷いなく現れる。石川の研究は重厚長大の度が過ぎてさらなる発展をなし得ないとの判断、その判断を踏まえた“石川 Lite”の提唱、といった石川評価の根幹に関わる立場表明も迷うことなくなし得た。

この小論でご紹介した2本の論文は、このような私の論文作法を徹底して実行した成果である。人語を尽くした格闘の記録であり、その末に聞こえた天声の報告である。